

全く新しい創作庭園 昭和44年に作られたこの造形物は、はたして日本庭園といえるであろうか。鶴亀島、蓬莱山などからかけ離れた庭である。基本デザインは友禅染の図案である「東ね熨斗」をデザイン化し、あでやかな色彩を施した。このような造形物こそが、日本庭園を世界的な芸術に昇華することが出来る。

当初は京都の友琳会館に作られたが、平成11年に友禅会館の移転に伴って、当庭の維持が出来なくなった。しかし、幸いなことに重森の故郷の吉備中央町庁舎が建設されることになったので、旧態を維持することが条件に無償で譲り受けた。



当庭の北側にある州浜は苔地の造形と相まって優しくしなやかな造形で、南部にある幾何学模様とは好一対だ



熨斗のデザインは葺き石や栗石により複雑に彩られている

現代の日本庭園の進むべき方向の一つではなかろうか

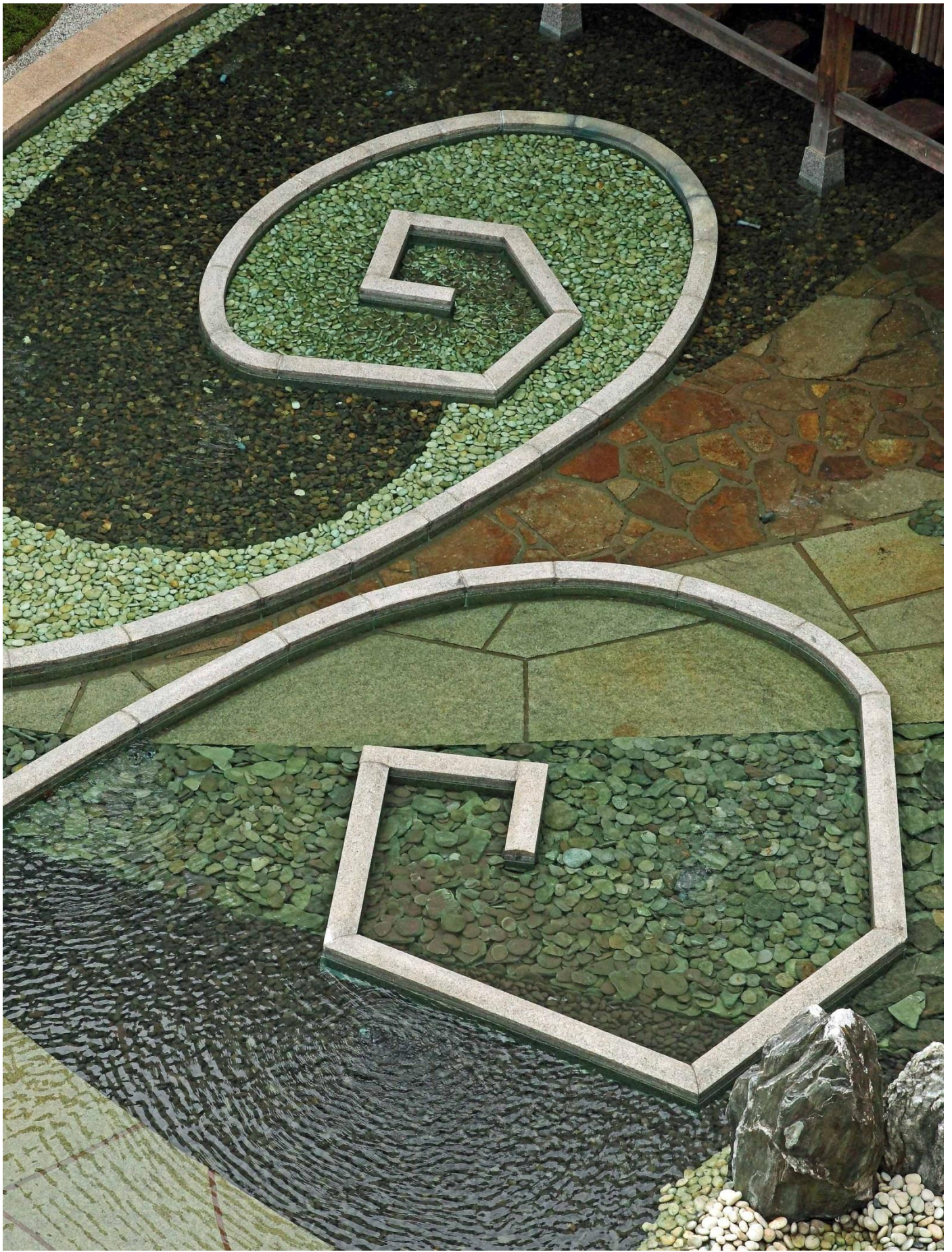
日本庭園と言えば池があり鶴島・亀島、橋と滝がある、とのイメージや、壁の中の白砂上に石が置いてある庭を想起する。しかし、我々は現代に住んでいるのだ、骨とう品を愛でるのではなく世界基準に適う美意識の庭が欲しい。



水面の「さざ波は」友禅染が鴨川で作業したことを象徴するために、給水口を36か所も作って、さざ波を再現した。



吉備中央町の庁舎はこの庭園に合わせて作られた。



はたして「日本庭園」と云えるだろうか。重森の挑戦状だ。